

孫文の諸名に関する論考(下)

莊 政 著

蔣 海 波 訳

- 一 前言
- 二 孫文の名、字、号(以上、第34号)
- 三 孫文の中外の変名(以上、第35号)
- 四 孫文の筆名
- 五 孫文のあだ名
- 六 結論(以上、本号)
- 附録 孫文の署名(写真)

四 孫文の筆名

孫文は革命を終身の事業とし、革命活動に従事する一方、多くの書物に接し、その学問は中外を貫き、文章や雄弁の才能を持っていた。その論著を編集、校閲する際、かつて多くの筆名をつけることがあったが、ただその使用は少ない。筆名に類似した署名に至っては、分類することが難しいようであるので、その性質の近いことを考慮して、暫定的にここに羅列しておこう。

(一)「杞憂公子」——光緒二十二年五月八日(1896年6月18日)、孫文がハワイからサンフランシスコに到着し、米国を横断し、革命を鼓吹した。致公堂会員は長く海外に居住し、洪門の「反清復明」の主旨を段々と忘れてしまっ

た。現地の華僑の風気は閉塞しており、孫文の革命思想を理解し、そしてその指導を受け入れたのは、一カ所にして、十人も満たないのであった。所謂「説く者がいかに熱をこめても、聴く者はうわのそら」というのは⁽¹⁰⁰⁾、当時の状況の描写であった。そのため、孫文はヨーロッパへ旅立ち、革命の種を播くこととした。彼はサンフランシスコにいたとき、かつて華商「聯勝雜貨舖」に仮住まいを構えたことがある。清国駐米公使楊儒は孫文が英国ロンドンへ行くことを察知したので、孫文の原稿と書籍を盗み取り、その情報を速達で駐英公使龔照璦に送った。その大要は、吳相湘の研究によると以下の通りである。

孫文は金沙加冕街第607号に仮住まいをしており、それは華商聯勝雜貨舖内にある。聴くところによると、近日中にシカゴからニューヨークを経由して、英国・仏国へ渡り、さらにシンガポールに行くそうである。途次、各会党と連絡をとり、武器弾薬を購入し、報復しようとしていることも聞いている。該当の者(孫文)は二冊の私家版の小冊子を携帯している。犯行の実態はないものの、李(鴻章)宰相に建言書を^{たてまつ}り、その文章のなかには確かにその名があり、孫文であることは

(100)「孫文学説・第八章有志竟成」(原注6『国父全集』第一冊、493頁)。日本語は伊藤秀一訳「心理建設」(訳注13『孫文選集』第二巻、137頁)から採った。

疑いない。いま原文を入手し、ここに同封する。いま調べたところ、その者が携帯している小冊子は、一つは黄梨洲の『明夷待訪録』のうち、「原君」、「原臣」の二編を摘録したもので、巻頭に端書きがあり、自署は「杞憂公子」。もう一つは「李宰相に上るの書」であり、洋々たる一万字余り(実数は7840字)、自称「文はもと香港で西洋医学を学び、医師の資格を得ている。宰相より農務を司ることを委託してもらいたい」としている。二冊の文章はともに流暢であり、昨日すでに総理各国事務衙門に詳細を報告した⁽¹⁰¹⁾。

孫文の李鴻章(1823-1901)に建言書を書いた動機については、学界では多くの論争がある。上述のいう「宰相より農務を司ることを委託してもらいたい」というのは、孫文の本意に近い。なぜならば、孫文は西洋医学を学ぶ以外、農学も修めていた。孫文の先祖は農家出身で、孫文はかつて少年時代に家族の農作業を手伝い、農家の苦労に対して、自らの体験も多くあった。さらに中国が農業で立国していること、農民が全国人口の八、九割を占めていることを鑑みて、国家を弱から強に変えようとするならば、農村の復興が何よりの急務だと、孫文は認識していた。特に西北の水利状況が整備されていないことから、急いで西北を開発しなければならないと考えた。ケシ栽培の主張の主旨は、すでに述べたように英国の経済侵略に抵抗し、「銀貨流出」を防止するための一時しのぎの策である。ゆえに西

洋に遊学し、農学研究に従事しようとした。一方、孫文が建言書を書いた主旨は官吏に登用してもらうことにあるという説があるが、(このような説は不正確で、その理由は)清末の官吏登用は科挙の功名を持って初めて可能になるということを知らないからである。博學で文章家の嚴復(1854-1921)の場合、英国に留学の際、「試験ごとに、最高の成績を修め、同学に感服された」。帰国後、首席教官に命ぜられたが、科挙の出身ではないため、その言論は重きを置かれなかった。そこで嚴復は発憤して八股文や時文を習い、さらに金を納めて「監生」の功名を購入して、科挙に合格しようとした。郷試に四度挑んだが失敗に終わった。このことは彼の後の政治生涯に大きな影響を与えた。孫文の場合、祖先には清朝に仕えた者はなく、その民族意識の強さを窺える。彼は中仏戦争の敗戦の年に、すでに満清政府を倒す志を持っていた⁽¹⁰²⁾。孫文が生涯を通して革命のために奮闘した事実は、その最もよい証明となる。

(二)「中原逐鹿士」——光緒二十三年五月二十八日(1897年6月27日)、孫文は英国を離れる前に、日本の志士南方熊楠を訪ねた。南方は日記簿を取り出し、孫文に揮毫を求めた。孫文はこれに応じて毛筆で「海外逢知音 南方学長属書 香山孫文拝言」(海外で知音に逢う 南方学兄属書 香山孫文拝す)と書いた。その横に南方は「コレハ六月二十七日孫氏親筆也」との注記を書いた。南方が所蔵している書籍の中に、孫文が贈った本二冊がある。『明

(101) 原注76『孫逸仙先生——中華民国国父』第一冊、130頁。原書の注に「案ずるに杞憂公子は鄭觀応の別名」とあるが、多数の孫文の名に関する考証論文では、すでに「杞憂公子」を収録している。孫文はこの名を用いたか、あるいは『明夷待訪録』原書の所有者鄭氏の名であったか、更なる考証を待ちたい。

(102) 「孫文学説・第八章有志竟成」(原注6『国父全集』第一冊、491頁)。

夷待訪録(原君・原臣)』、『紅十字会救傷第一法』の二冊である。前者には「南方先生鑑 孫文持贈」、後者には「恭呈 南方熊楠先生大人雅政 中原逐鹿士」との文字が記されている⁽¹⁰³⁾。いわゆる「逐鹿」とは、政権争奪の比喻で、その出典は『史記』にある。「秦失其鹿、天下共逐之」(秦其の鹿を失うや、天下共に之を逐う)⁽¹⁰⁴⁾。孫文は自ら「中原逐鹿士」と称することから、彼はすでに『史記』を読んだことがあると判断できる。孫文は清朝の政治が益々腐敗していく現実をみて、「排滿興漢」の念を抱くようになった。ゆえに、孫文は志士であれば、中外に分けることなく、一致団結して義挙を遂げようと望み、自ら一兵士として、先頭に立とうとした。

(三)「南洋小学生」——光緒三十三年七月十二日(1907年8月20日)、孫文はシンガポールにおいて、張永福(1872-1957)、林義順(1879-1936)ら華僑のリーダーたちと、『中興日報』を創設した。『中興日報』は保皇党の『南洋總匯報』の言論を論破し、革命党の南洋における最有力な宣伝機構となった。孫文はかつて自ら「論懼革命召瓜分者乃不識時務者也」⁽¹⁰⁵⁾と「平実尚不肯認錯」⁽¹⁰⁶⁾の文章を発表し、保皇党の論調を批判した。その時「南洋小学生」

の筆名を使った(案ずるに前者は1908年8月6日、後者は同年9月15日に発表された)。

(四)「南洋一学生」——長年に亘って孫文に随って革命に従事した学者党员鄒魯(海濱、1885-1954)は、曾て丘逢甲進士(1864-1912)に師事したことがある。鄒魯の著書『中国国民党史稿』のなかには、以下の記述がある。

南洋のイギリス殖民地では、シンガポールで『中興報』を創設し、本党の宣伝機構として、『總匯報』との論戦に挑んだ。

『總匯報』の、革命は今日の中国に実行できない、革命が瓜分を招く、満洲族は我等と同種であるとの主張に対して、『中興報』はそれらの論調を批判し、革命以外に救国の方法はない、革命以外に瓜分を回避する方法はない、満洲族は決して我等と同族ではない、と主張した。『總匯報』は応えられなくなった。当時『中興報』の主な執筆陣は胡漢民、汪精衛、田桐、居正、王斧軍らであった。総理も当時、自ら筆を執り文章を書き、「南洋一学生」と署名した⁽¹⁰⁷⁾。

一体「南洋小学生」であったか、あるいは「南洋一学生」であったか、なお慎重に資料を蒐集して考証を行わなければならない。当時孫文

(103)原注50『中山先生倫敦蒙難史料考訂』167-168頁。

(104)『史記・淮陰侯列伝第三十二』。

(105)原注6『国父全集』第二冊、81-84頁。

(106)原注6『国父全集』第二冊、84-86頁。

(107)鄒魯『中国国民党史稿』(500頁、台北、台湾商務印書館、1970年5月第二版)。太史公「国父一生筆名的統計」(『暢流』46巻4期、台北)には次のように見える。「中山先生は1907年、ベトナムからシンガポールに赴き、同盟会南洋分部を成立させ、自らその部長を兼任し、革命工作を企てた。当時、革命派の『中興日報』と立憲派の『南洋總匯報』との間で激しい論戦が繰り広げられた。中山先生は自ら政論文章を作り、『總匯報』の「革命は瓜分を招くに足りる」といった謬論を斥けた。その際の署名「南洋一学生」は、鄒魯の『党史稿』と居正の「中興与光華」がともに証言している。しかし馮自由の「南洋各埠革命党述略」では、「南洋小学生」としている。案ずるに、当時、居氏は『中興日報』の編集に就いていたから、自らの経験に基づいた回想はかなり由来のあるものである。

はすでに四十四歳で、中年盛りの年齢になっていたし、広く認められた革命派のリーダーであった。彼が文章を作り、保皇党を論破するには、「南洋一学生」という筆名は比較的に信じられる。まして鄒魯、居正(1876-1951)らは革命党の重要幹部で、特に後者(居正)の場合、『中興日報』の編集に就いていたので、彼等の説は当然、重視されねばならない。

(五)「凌霄」、(六)「明德」——孫文の姪である孫楊連逢(孫妙茜女史の孫)の回想では、「一番上の兄・連合の話では孫中山先生の初期の事跡は以下のようなようです。……李鴻章に提出した建言書は、孫中山先生が自ら作ったものだ」と確信しています。そのほかに多くの論文を書かれました。私の知る限り、彼の筆名には、凌霄、日新、徳明、明德などがあります」⁽¹⁰⁸⁾。案ずるに孫文の譜名徳明、号日新(後に逸仙に変えた)は、すでに詳しく紹介した。ほかの二つの筆名——「凌霄」、「明德」——は、その出典を知ることが出来ず、将来の資料蒐集に待ちたい。

(七)「寶嘉」——孫文の故郷の後輩程光庚の回想には、「私は1933年、石岐で中西薬局で店員を務めたとき、中山先生も曾てこの薬局に医者として勤められたことがあり、名を「寶嘉」といい、自ら薬を製造し、そのラベルに「寶嘉監製」の文字が書かれたと聞きました」⁽¹⁰⁹⁾、とある。

「寶嘉」という名は分類しにくいので、暫く孫文の筆名として列べておく。

(八)「黔上昧昧生」——『澳門日報』副総編集長陳樹榮先生の考証によると、清末澳門で出版された『鏡海日報』の初期の社説は清朝政府の政治腐敗に対する批判が相当激しい。その内「黔上昧昧生」という署名は、或いは孫文のその時期の筆名であったかも知れない⁽¹¹⁰⁾。

以上が孫文の筆名(それに類似するものも含む)である。全部で「杞憂公子」、「中原逐鹿士」、「南洋小学生」、「南洋一学生」、「凌霄」、「明德」、「寶嘉」、「黔上昧昧生」の八個ある。ここで付言しなければならないのは、上述の八個の筆名のうち、あるものは考証を経て確実な証拠があるが、一部のものは他者の著作から引用され、その出典が必ずしも明示されていないため、実証的な判断ができない。暫く懸案とする。さらにいえば、孫文には必ずしもこんなに多くの筆名があったとは限らない。一方、発見されていないのみであって、それ以外の筆名を持ったことも考えられる。ひとまず疑問として残しておく。

五 孫文のあだ名

いわゆるあだ名とは、「渾名」ともいい、俗には「外号」ともいう⁽¹¹¹⁾。一般的に人の容貌、性格あるいは行動の特徴によって作られた呼び名である。要するに人の特徴を、前人やものに喩えたもので、褒貶、毀誉の意味も込められている。顕彰や嘲笑的な意味も含むため、

(108) 原注20『孫中山史述憶訪録』130頁。

(109) 同前、142頁。

(110) 陳樹榮「孫中山与澳門初探」(国父紀念館編『中山學術論文集——国父一百二十五歳誕辰紀念』75頁、1990年11月)。

(111) たとえば、『元曲選』「梁山泊李逵負荊雜劇」の中に、「某姓宋、名江、字公明、綽号順天呼保義者是也」(某、姓は宋、名は江、字は公明、綽名は順天呼保義という)とある。

本来ならばこのたぐいのものは正伝に取り入れられるべきではないが、しかし古今中外の名士にはあだ名を持つものは少なくない。たとえば唐代の李林甫(?-752)は「李猫」と呼ばれ、李義府(614-666)は「人猫」と呼ばれた。アメリカ元大統領アイゼンハワー(D. D. Eisenhower, 1890-1969)のニックネームは「アイク」で、頗る簡潔で親近感を覚える。中国人は皆孫文のあだ名は「孫大砲」であることを知っているが、実は彼には他人から作られたあだ名が十数個ある。その多くは尊敬の意味を込めたものだが、軽蔑嘲笑的なものもある。孫文は度量が大きい、温厚な性格で、人の褒め称えに対して平然と対応するだけではなく、否定的な批評と非難に対しても弁解しない。彼は厳格でありながら、ユーモアのセンスも持ち合わせていた。時には、「返報」として、同志に対しても、あだ名を作り、自らはユーモアを楽しむことがあった。

ここでは孫文の十数個のあだ名の由来や意味を、同じく時系列に沿って述べておこう。説明しなければならないのは、一部のあだ名は優雅さに欠けているし、その名は現実と合わないものもあるということである。元々、あだ名というものは軽快なもので、ユーモアを含むものであるので、まじめに考える必要が無いかも知れない。しかし、孫文に対する誤解により作られたあだ名について、これを機会に資料などを検証し弁明することは、全く無意味なことではない。孫文のあだ名は以下の11個である。

(一)「石頭仔」——

1、孫文は幼い頃、活発で腕白であった。よく近所の樹に登り、鳥の卵を取ったり、石を投げて鳥を撃ち落としたりするので、村人はそのやんちゃぶりを見て、「石頭仔」というあだ名を与えた⁽¹¹²⁾。

2、孫文の性格は堅強で、弱いものを助け、強暴なものをやっつける性格を持っていた。孫文は十歳のとき、勤勉によって豊かになった三兄弟を官吏が訳もなく逮捕し、拷問した。そして一人が死亡し、ほかの二人が投獄された。村民たちはえん罪だと知りながらも、声を出して抗議することはできなかった。孫文は何と身を挺して、官吏に詰問した。官吏が怒り、孫文に向かって刀を振りかざした。幸い孫文は軽快に逃げ、その場をしのいだ。

3、孫文は十三歳のとき、隣村の「豆腐秀」という人が、揚げ豆腐を行商してきた。孫文と友達の楊某が竹垣を隔ててその人を覗き、いたづらをした。これに怒り出した「豆腐秀」は沸騰した油を竹垣にぶっかけた。孫文は石を以て「応戦」し、油鍋に命中し、鍋を割り、油が流れてしまった。「豆腐秀」は孫家に訴え、弁償を要求した。母親楊氏は孫文を叱ったが、孫文は是非を弁明し、その要求を斥けた⁽¹¹³⁾。

4、孫文は幼い頃、勉強以外の時間は、家族の農作業を手伝うほか、友達を率いて、野外を走り回った。さらに自ら頭目を演じ、戦争ごっこをした。寝食を忘れることさえあった。そのため、たびたび服を破り、母親楊氏に縫い繕わせた。友達は孫文の性格は剛強であることを知り、「石頭仔」のあだ名を与えた⁽¹¹⁴⁾。

(二)「洪秀全」——香山県は山と海に囲まれ、

(112) 陸天祥「孫中山先生在翠亨」(『広東辛亥革命史料』60頁、広州、広東人民出版社、1981年7月)。

(113) 簡又文「孫総理少年時期逸事」(原注7『孫中山先生感憶録』8頁)。

(114) 黄学光『国父革命逸史』(3頁、台北、台湾商務印書館、1965年11月)。

古くから会党が多くて、民族思想の発達した地域である。清朝を通じて、孫氏一族の中に、科挙に参加した者がいなければ、清朝の官僚になった者もない。孫文が生まれた同治五年(1866年)は、ちょうど太平天国が鎮圧された翌々年で、香山県と洪秀全の故郷花県との距離は百キロにも満たない。風気の影響は当然無いことはない。孫文は私塾で学んだ際、太平天国の老兵馮爽観から、よく太平天国に関する故事や洪秀全・楊秀清らの逸話を聞かされ、興味津々であった。孫文の民族の大義や革命の思想はここから芽生えたという。洪秀全は一介の書生から身を起こし、異民族の統治を駆逐したので、成敗を以て英雄を論ずるべからずと、洪秀全の生き様に孫文は深く共鳴した。清朝の腐敗に対して、常々批判した孫文に対して、村人は驚きを隠せず、孫文を「洪秀全」と呼んだ。孫文も第二の洪秀全と自認したようである⁽¹¹⁵⁾。香港の西医書院創設者何啓(1859-1917)の父親何福は、洪秀全に洗礼を司った牧師であった。二代にわたって革命家に師事された何氏親子は、歴史上誠に希なことであろう⁽¹¹⁶⁾。

(三)「番鬼仔」——案ずるに旧時外国人を「番子」と呼び、広東語では小さなものを「仔」と呼ぶ(例えば猪仔)。光緒九年(1883年)春、孫文は十八歳で、ハワイの最高学府であったオアフ・カレッジ(Oahu College)に進学した。この学校はアメリカ基督教教会が経営したもので、宗教教育の雰囲気は濃厚であった。孫文は基督教に入信しようと考え、手紙で兄徳彰

(孫眉)の同意を求めたが、果たせなかった。兄孫眉はその手紙を故郷の両親に転送したところ、孫文の父親がすぐに孫文を呼び戻した。孫文はやむを得なく学業を中止し、帰郷を余儀なくされた。父親は孫文の基督教への入信を嫌い、その非を改めようとして、孫文を北帝廟に連れて懺悔を迫った(広東地方では、子供が生まれると、土地の神を拝み、子供の平安を祈る風習がある。孫文が生まれた際、母親楊氏は風習に従って北帝廟で拝んだ)。やむを得ない孫文は一応跪いて懺悔の意を示したが、のちに親友陸皓東(1868-1895)とともに北帝廟に赴き、鬱憤を払うため、石を北帝像に投げつけ、その腕を折った⁽¹¹⁷⁾。村民たちはそれを聞き、銅鑼を鳴らして孫家にその罪を問おうとした。そして孫文にこのようなあだ名を付け、孫文が留学して「崇洋媚外」(外国を崇拜する)になったことを罵った。

(四)「通天曉」——孫文は土地の神像を破壊したこともあって、郷里には長く居られなかった。1883年秋、香港に赴き、まず英国基督教聖公会の経営する中学校拔萃書院(Diocesan Home)に入学したが、翌年4月に、香港の中央書院(Central School)に転校した。孫文はそこで勉学し、夜間は家庭教師を雇い国学の学習に励んだ。クラスの中では、孫文の英語成績は最も優れており、教師、同学の賞賛を受けた。彼は努めて学び、好んで質問した。常に「学問というのは、学ばず、問わずして、どうして知ることが出来るか」といった。彼は諸子百家の著述などを広範囲に亘って読み

(115) 吳敬恒編『国父孫先生年譜』(3頁、重慶、中央宣伝部、1971年2月、台湾重版)。原注43『総理事略』5頁。

(116) 葉夏聲編『国父民初革命紀略』(3-6頁、台北、孫總理侍衛同志社、1948年11月)。(訳者注：この注記の中に著者が孫文と洪秀全の容貌の相似について述べた部分がある。計402字、面相学に及ぶ。日本語訳を省く)。

(117) 原注26『孫逸仙伝記』43-45頁。

あさり、多くのことを知っていたので、同学は、彼に「通天曉」というあだ名を与えた⁽¹¹⁸⁾。

(五)「孫行者(孫悟空)」——光緒十五年(1889年)歳末、孫文は陳少白と香港の西医書院で学び、宿舍を同じくし、友情が深まり、義兄弟の契りを結んだ。大凡革命家はみな精力旺盛で、活力に満ち、孫文、陳少白も例外ではなかった。当時とはともに青年盛りで、ややもすれば意見の不和があれば、相手を罵っている間に、ものを投げ合うこともあった。ある日、隣家の王煜初牧師(王寵恵の父)宅に突然、一個のランプが学生宿舍から飛び込んできたので、驚いて書院に抗議し、調査を求めた。調べた結果、確かに孫文と陳少白が喧嘩して、投げたものであった。孫文の姓は「孫」であり、その活発ぶりは、少年時代に劣らないので、「孫行者」というあだ名が与えられた。十年後、梁啓超は日本で孫文と数度にわたって会見し、合作について協議を重ねた。しかし康有為はそれを警戒し、「是非とも「孫行者」の異にはまるな」と警告した。そのほか、光緒十六年(1890年)、孫文が二十五歳の時、医業の傍ら革命を鼓吹し、広く交友した。孫文は同学関景良とよく交際し、関の母親黎氏は当時西医書院の通訳を務めており、よく孫文を招き入れ、食事を招待するなど、彼を可愛がった。黎氏は孫文の言論の激しさを知って驚きを隠せなかった。孫文の志が高くて、言論のスケールも大きいことをみて、黎氏はもしかすると、皇帝でもなろうとしているので

はないかと訊いたところ、孫文は「清朝政府を倒し、我が漢民族の山河を取り返すことは、皇帝になるよりも重要だ」と答えた。黎氏はその答えを聞いて、理解できずひどく困惑し、孫文を「孫悟空」のように見つめた⁽¹¹⁹⁾。

(六)「山將軍」——孫文は早い時期に秘密結社洪門と交流があった。正式に加盟したのは光緒二十九年十一月二十四日(1904年1月11日)で、場所はハワイの致公堂であった⁽¹²⁰⁾。それより先に到着した梁啓超は孫文派との合作を口にしながら、実は別の企てを持っていた⁽¹²¹⁾。彼は康有為に宛てた手紙で、孫文に「山將軍」というあだ名を付けた。

(七)「吳大帝」——民国成立前の某日、孫文は留日学生と集会を開いた際、幾分の酒も入っていたので、「在席の大半は帝王の末裔である。成禺は劉氏の漢、小園(李書城)は李氏の唐、友如(石志泉)は石氏の晋、私は吳大帝と称することができる」、と冗談を飛ばした⁽¹²²⁾。何故「吳大帝」と自称したかということ、三国時代の東吳の開国皇帝・孫権(字は仲謀、182-252)を、孫文と同じ宗族と見なしたからであろう。案ずるに漢字の声韻には、同音同借の意味を含んでおり、「吳」と「無」とは同音で、当然、「通借」の意味が用いられる。吳大帝とは、「無帝王」の敷衍として理解される。民国創立当初、革命党のなかの一部の守旧派文士は、中華が既に恢復したので、孫文に帝王になるのを勧めた。孫文はこれを固辞し、ついには臨時大總統の席を袁世凱に譲った。孫文が

(118) 尚明軒『孫中山伝』(9-15頁、北京、北京出版社、1981年9月第二版)。

(119) 羅香林『国父之大学時代』(30-31頁、台北、台湾商務印書館、1954年10月増訂一版)。

(120) 「総理在美洲参加洪門名冊撮影・附洪門決議案」(中国国民党党史会蔵、030/28)。

(121) 梁啓超は1899年、ハワイにおいて致公堂に加盟した(丁文江編『梁任公先生年譜長編初稿』上冊、102頁)。

(122) 劉成禺「先総理旧徳録」(原注57『我怎樣認識国父孫先生』353頁)。

帝王思想を持たないことはこれで証明される。

1924年春、孫文は民権主義について講演を行い、四億人民は皇帝であり、国家元首を含めて官吏は皆国民の公僕であると喻えた。民国成立当初から、孫文は『革除前法官所称呼令』を頒布し、「大人」や「老爺」などの称呼を廃止すると同時に、官庁の場合は、互いに官職で呼び合い、民間の場合は一律に「先生」、「君」で呼ぶことを定めた。

(八)「孫大砲(孫大泡)」——孫文のあだ名として、「孫大砲」は周知である。問題はこのあだ名がいつ作られたか、考証の必要があるということである。ここでは、時間順に関連史料を整理してみよう。

1、孫文は早い時期にハワイで革命活動をしたとき、当時は風気未開で、有力な協力を得られなかった。賛同者は僅か数人しかいなかった。のみならず、彼を風刺嘲笑するものもいた。夢を語る者として、彼に「孫大砲」というあだ名を与えた⁽¹²³⁾。

2、サイゴン華僑は孫文に対して非常に尊敬していた。ある日、某氏が「宜心茶居」(茶房)で孫文を誹謗中傷し、「孫大砲」云々と話った。隣席の人がそれを聞いてその「孫大砲」云々と言った人と口論になり、ついに拳を振って、その人を追い出した。このことから、華僑が孫文に対して擁護と敬愛の念を抱いていたことが分かる⁽¹²⁴⁾。

3、民国創立当初、孫文は臨時大總統に就任したのち、政権を袁世凱に譲ることを主張し、

自ら党員を率いて社会の建設と開化に力を注ごうとした。いわゆる二十万里の鉄道政策というものは、他人の目には大砲を放つ(大風呂敷をひろげる)ように映ったが、彼にとっては、確実に実現可能な政策であった⁽¹²⁵⁾。

4、1912年8月、孫文は袁世凱と北京で初めて会談した際、軍隊と鉄道など国家建設の重要事項について、議論を交わした。たとえば、8月29日の第五回会談の際、孫文は「これから十年間、君は大總統として、五百万人の精銳部隊を訓練する。それにより始めて地球上において各国と国際平等について強く語ることができる。私はこれからの十年間、二十万里の鉄道を建設する。完成すれば、毎年、八億元の収入が見込まれる。それを以て部隊の編成や中央及び地方の行政経費に充てることができる。鉄道建設の費用について、心配することはない。公司の名義で六十億元を借款し、四十年で返済する。自ら外国に赴き借款のことを担当し」ようと述べた⁽¹²⁶⁾。孫文は未来の新中国のために雄壮な青写真を描いたが、その志の高さと言葉の大きさに、賛同する者は極めて少なかった。ある人は彼が専ら理想を追求し、現実性がないとして、「孫大砲」のあだ名を与えた。

5、広東語の中に、虚言をする者を「大泡」(大きな泡、すぐ消えてしまう)とする俗語がある。孫文もかつて、同志でコックである陳和に対して「大泡和」と呼ぶことがあった。案ずるに、広東人の習慣で孫文を「孫大泡」

(123) 周哲『孫中山』(北京、三聯書店、1950年4月四版、120頁)。

(124) 陳良口述「在西貢堤岸三次会見孫中山的回憶」(中国人民政治協商會議廣東省委員会文史資料研究委員会編『孫中山与辛亥革命史料專輯』、34頁、広州、広東人民出版社、1981年8月)。

(125) 李劍農『中国近百年政治史』下冊(380頁、台北、台湾商務印書館、1957年5月)。

(126) 「与袁世凱第五次的談話」(陳旭麓、郝盛潮主編『孫中山集外集』185頁、上海、上海人民出版社、1990年7月)。

と呼び、その後の音が同じだということで、口から口へと伝わった結果、「孫大砲」となったのではないか。

実に孫文は生涯を通して学問に励み、群書を博覧し、透徹した見識と成熟した考えを持った。宮崎滔天は孫文を「彼何ぞ其思想の高尚なる、彼何ぞ其見識の卓抜なる、彼れ何ぞ其抱負の遠大なる、而して彼何ぞ其の情念の切実なる、我国人士中、彼の如きもの果して幾人はある、誠に東亞の珍宝なり」⁽¹²⁷⁾と絶賛した。孫文の創見である「知難行易」学説は、人々に真の知識を究め、実践に尽力することを鼓舞するためにある。胡適(1891-1962)はかつて

中山先生は実践者である。凡そ真の実践者には、高遠な計画を持っている……。中山先生は生涯を通じて損をしているが、彼の理想によって損をしたのではなく、皆が彼の理想を空談として見ることによって損をしたのである。……こんなときこそ、もし科学的な知識を以て、確実な遠大な計画を定めれば、決して実行できない道理がない。以前は知らずになお行えたのに、現在は正確な知識を有するので、さらに行いやすくなるはずのである。との見解を述べた⁽¹²⁸⁾。

真理は往々にして少数の人の掌中にある。英雄のみが英雄をみとめる。上記の宮崎滔天と胡適の言葉は、孫文が決して理想のみを重視する人ではないことを証明した。彼の精密な『建国方略』を読めば分かるように、実践に無関係なものはない。だからこの名実相伴わないあだ名に対しては、弁明の必要がある。(九)「中国のモーゼ(中国的摩西)」——モーゼ(Moses)はイスラエルの族長で、イエス・キリストの命を受け、「十戒」を作った。また部族民を率いて、暴政を避けるために、エジプトから脱出した。『旧約聖書』『出エジプト記』にその事跡が記されている。

(十)「中国のベンジャミン(中国的班哲明)」——ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin, 1706~1790)はアメリカの政治家、自然科学者、経済学者。アメリカの建国の父の一人。独立宣言書の起草委員をつとめ、独立戦争後のイギリスとの外交交渉に全権として従事、アメリカ憲法制定に中心的な役割を果たした。高潔な人物として、尊敬されている(*43著者はドイツの文学者ベンヤミン(Benjamin Walter, 1892-1940)を紹介しているが、誤りである)。(十一)「中国のワシントン(中国的華盛頓)」——ジョージ・ワシントン(George Washinton, 1732-1799)はヴァージニア州出身、誠実で勉

(127) 宮崎滔天「三十三年之夢」(宮崎龍介、小野川秀美編『宮崎滔天全集』第一巻、119-120頁、東京、平凡社、1971年7月)。

(128) 傅啓学『国父孫中山先生伝』(592頁、台北、中央文物供应社、1968年2月再版)。胡適はもともと孫文を見下げていた。胡適は、孫文は話すことが上手いが、頭は恐らく空っぽだと認識していた。ある日、胡適は孫文を訪ねたとき、孫文の満杯になった本棚をみて、心の中で嘲笑いながら、「孫文もよくまあこんな飾りが上手いね」と思った。孫文が用事で離れた隙を見て、一冊を取りだしてみたら、殆どの頁に書き込みがあった。びっくりして、いやこれは偶然かも知れないと想い、更に一冊、二冊と取りだしてみたら、孫文の精魂を込めていないものは一冊もない。胡適は恥ずかしい想いをしながら帰ってきた。事後、ひそかに人々に『孫大砲』は実は軽視のできない実弾です」と語った(原注89『孫中山の歷程』8-9頁)。

学熱心。1776年、独立戦争の際、十三州の軍司令官に推され、八年間の奮闘をへて、イギリスからの独立を勝ち取った。アメリカ初代大統領に選ばれた。三回目の当選を固辞し、山林に隠居したのち、1799年2月24日、死去。アメリカ人は彼を記念して、首都の名に彼の姓をつけた。

オーストラリアのヘンリ・ジョージ学会会長グリージ・ケンス(Grigg, Kenneth N.)氏が以下のように述べている⁽¹²⁹⁾。

(孫逸仙は)「中国の救世主」になることを、自らの責任であると堅く信じていた。ゆえに彼は「中国のモーゼ」の称号を得た。同様に、ある人は彼を「中国のベンジャミン」、あるいは「中国のワシントン」と称した。

アメリカ人は孫文を「中国のモーゼ」、「中国のベンジャミン」、「中国のワシントン」と称したことについて、若干注釈が必要である。その一、モーゼは「十戒」を創設し、暴政を避けるために人々を率いて、エジプトから脱出した。一方、孫文は三民主義や、建国方略を制定し、満洲統治者を駆除し、中華を振興するため、中国の長い封建皇帝専制を打ち倒し、アジアで最初の民主共和国を創建した。その功績は歴史的に評価されている。その二、ベンジャミンはアメリカ合衆国憲法の制定において、ワシントンは独立戦争において功績を立て、ともにアメリカの礎を築き上げた偉

人として、奴隷解放のために献身したリンカーン(Abraham Lincoln 1809-1865)とともに、人々に尊敬されている(*44この部分は上記注43と同様の理由で若干省略・意識した)。一方、孫文は中国の人々に「中華民国国父」と尊称された⁽¹³⁰⁾。

以上より、孫文のあだ名は、「石頭仔」、「洪秀全」、「番鬼仔」、「通天曉」、「孫行者(孫悟空)」、「山將軍」、「吳大帝」、「孫大砲(孫大泡)」、「中国のモーゼ」、「中国のベンジャミン」、「中国のワシントン」の11個である。

六 結 論

本文で挙げた孫文の様々な名前は、62個にのぼった。分類すると、名、字、号は全部で13個、変名は30個、筆名(類似の名を含む)は8個、あだ名は11個、である。本稿は純粋な学術論文とはいえない。そのうち、若干検討・補充する必要な部分がまだ残っている。要するに、著者は長年にわたって孫文の生涯と学術思想について資料収集に努めてきたが、本稿はその一端であり、不備は免れない。諸家大方のご指摘ご意見を賜りたい。おそらく、孫文の諸名はさらに多くあると考られる。もしかしたら、ギネスブックの記録を塗り替えるのかもしれない。二十一世紀への世紀のプレゼントとして、記念すべきことであろう。

(129) 葛立格「孫逸仙——一些伝記上の考察」(『孫中山先生与近代中国學術討論會論文集』第一冊、411頁、台北、中央文物供应社、1985年12月)。

(130) 1940年4月1日、国民政府は「倡導国民革命、手創中華民國、更新政体、永奠邦基、謀世界之大同、求國際之平等、光被四表、功高萬世、凡我國民、報本追遠、宜表尊崇。通令全国、尊称先生為中華民國國父。」(「国民政府民國二十九年四月一日渝文字第三一九号訓令」『国民政府公報』、重慶、国民政府文官处印鑄局印行、渝字第245号、1940年4月3日、11頁)と、孫文を中華民國「国父」として、その尊称を正式に決めた。

錢穆(1895-1990)は、中国伝統政治の特徴は道義を重視し、権力を重視しないとしている。孫文は統治の体制外に身を置いているので、道統をより重視する。錢穆はこう述べている。

中山先生の革命は、見識の浅い者はその源を西洋にあるとしている。しかし中山先生は必ず、堯、舜、禹、湯、文、武、周公、孔子の伝統を継承していると称する。さらに中山先生の考えでは、自分自身を専ら一政治人物としてあることを欲しなかった。彼は民国を創建する目的を、ただ一治統の更新だけではなく、道統の復興を求めることにあつた。これは中山先生の内なる根強い中国伝統觀念が存在したことによる。……中山先生は一政治人物のみならず、実は学界から政界にいたるまでの理想的な人物である⁽¹³¹⁾。

要するに、思想家、政治家、革命家はどの時代にも存在する。ただ、偉大な思想家、徹底した実行家、傑出した革命家、該博な学問

家を一身に集めた人は、古今東西に幾人いるのか。「哲人日已遠、典刑在宿昔」(哲人は日に已に遠きも、典刑は宿昔に在り)(※45文天祥「正気歌」。訳文は吉川幸次郎『元明詩概説』(東京、岩波書店、1963年6月、69頁)を引用)。西方の学者が指摘したように、中国にとって、死去した孫文は生きていた孫文よりも意味が重要であり、更に内外の人々に尊敬されている⁽¹³²⁾。願わくは将来、孫文の諸名に関する論著が現れ、より多くの人々が孫文の多彩な革命生涯と革命のために奮闘した歴史に対する理解を深められることを。例えば、彼が海外に亡命した歳月については、いたる所で追放されたこともあった。この文章で引用した史実は、彼の様々な険しい道程の一部に過ぎないのである。

附録 孫文の署名(写真)

(省略)

莊 政(JUANG Jenq, 台北医学大学通識課程教授)

蔣 海波(JIANG Haibo, 孫中山記念館研究員)

前々号(第34号、2003年7月)正誤

65頁 3行 (誤)沙坪? → (正)沙坪壩

66頁24行 (誤)吉沢謙吉 → (正)芳沢謙吉

(131) 錢穆の中央研究院で発表した学術講演(台北、『中央日報』1977年4月3日、第二面)。

(132) 原注23『孫中山伝』15頁。孫科はかつて著者のインタビューに応じて、孫文が生前クロボトキン『互助論』の影響を深く受けたと指摘した(台北、『中央日報』1967年4月16日)。(訳者注：この二つの文献は直接「中国にとって……人々に尊敬されている」の一文との関連性が見られない。記しておき、今後の校訂に待ちたい)。